

## 食人慣行社会の変容過程

——スマトラ、バタク族の場合——

別 技 篤 彦

はじめに

食人という一つの慣行はいわゆる未開社会にはかなり普遍的に行われたようであり、地域的にみても近代に至るまで南北アメリカ、アフリカ、太平洋諸島その他に多くの例がある(1)。そしてこれが実践された理由としてはすでに多くの民族学者が論じているようにそれぞれの地域社会によりさまざまのものがあつた。ホモ・サピエンスとしては純然たる嗜好の点からのみ人肉食するということはむしろ稀であり、大部分は何らかの儀礼、あるいは復讐、ないし刑罰の手段として行なつたようである。儀礼としては生産の豊饒を願うための儀礼のようであり、また復讐や刑罰の手段とするときもこれにより相手のもつ神秘的な力が自己の所有に帰するといひわゆる「生命の委譲」のごとき觀念が底流に存在したと思われる(2)。もちろん人肉が美味である事実は理解されていたのであろうが供儀として相手の人間を扱ったときは、普通人にとっては恣意的に殺人を行つてその肉を食するときには慎しんだものであろう。また食人と首狩の風習とが結合するものもあるが一方では分離されている例も少なからず、たとえ首は切つて

も肉は食しないものがかなりある。いずれにしてもかかる慣行をもつ未開社会がいかに近代化していくかのプロセスは文化変容 (acculturation) の立場からも極めて興味あるものと考えられるのであるが、本稿ではスマトラのバタク (Batak) 族を中心に述べてみたいと思う。

(一)

筆者がこの問題に触れざるをえなかったのは、近世における東南アジアの地域研究のパイオニアであるラツフルズの業績についての研究を進めてゆくうちに起ったものであった。バタク族が恐るべき食人の慣行をもつことはすでに中世アラブの記録にも記されており、また近世にも多くのヨーロッパ人記録者が恐怖を以て述べたところである。しかし現実にはバタク族は古くインド系文化の影響を受けてすでにかなり進歩した文化段階にある民族であり、父系の氏族共同体 (marga) を形成し、独自の文字や文献も所有していた。音楽にもすぐれ、各種の楽器を使用している。わゆる「バタクオーケストラ」は有名である。それなのになぜ食人の慣行を有していたのであるのか。一八一八年以来、スマトラ西岸ベンクレーンに総督として駐在し、スマトラ奥地の民族や文化の解明ととりくんだラツフルズはまずこの点を明らかにした最初の人である。彼はバタク族が恣意的に人肉を食するものではないこと、食するのは四つの罪を犯したものに限られることを明らかにした。すなわち (一) 姦通したもの (二) 強盗を行ったもの (三) 慣習を犯して同一部族内で結婚したもの (バタク族は *Marga* の外婚制を守る) (四) 個人をだましうちしたものである。そしてもちろんその食人の実践の光景は嫌悪すべきものではあったが、それも一定の順序のもとに首長の指導下に秩序を保って行われることが述べられた<sup>3)</sup>。その後のこの慣行についてはユングフィン、フォルツ、フェットその他多くの

研究者があらわれたが<sup>(4)</sup>、要するにラッフルズが指摘したごとく、バタク族の食人慣行はかれらの社会内でのきびしい法体系の一部であることが確認されたのである。つまりそれまで食人とはヨーロッパ人にとってはただ未開と野蛮の代名詞であり、原因については何らの深い考察も行われなかったものが、ラッフルズにおいて始めて地域の一つの社会秩序と結合する事実が認識されたことになる。

しかもこのバタク族は一九世紀末までかかる食人慣行を残存させていたにかかわらず、今日ではスマトラにおける代表的文化民族の一つとして大きな変容を遂げているのである。食人慣行それ自体の研究も興味あるものであるが、ここではいかなるプロセスでこの社会の変容が進行したのかを考えてみたい。それはいわば一つの特異な民族共同体が閉鎖的社会から開かれた社会へ向つての変化と拡大の事例であるとともに、それ自身一つの歴史地理学的な地域変容の実例ともみられるからである。

## (二)

バタク族の場合、その変化の原動力となつたものはかれら自身の自主的な条件ではなく、外部からの指導された変容の条件であり、特にキリスト教の布教であつた。宣教師の活動が食人慣行をもつ社会の変容に大きな影響を及ぼした例はフィジー島、ニュージールランドのマオリ族その他各地に例があるが<sup>(5)</sup>、バタク族のごとき文化段階にあつた民族の場合はどうであつたらうか。要約するとこれから起つた影響は精神面と物質面の双方から文化変容の条件を形成していったと思われる。

バタク族は居住地により四つの部族に大別されていた。このうち最も南方に住むアンコラ (Angkola) 部族はミナ

ンカバウ族の地域に接するため早くからイスラム化されていた。従つてここには近世には殆ど食人慣行はなく、同時にキリスト教の布教も困難であった。これに対し他のカロ (Karo) トバ (Toba) ティムール (Timur) パクパク (Pakpak) の諸部族は固有のアニミズムを信じて、生き霊 (tondi) 死霊 (begu) の觀念を重視し、特にトバ、パクパク族の間では最も食人の慣行が強かつたといわれる(6)。

初期のキリスト教布教はやはり困難で一八三四年、よく事情を調査せずにこの地域へ入り込んだ二人のアメリカ人宣教師は殺され、食べられた。恐らく何か無謀なことを行つた結果「刑罰」をうけたのである(7)。本格的な布教が開始されたのは一八五六年からであるが、その二年前、オランダの言語学者ファン・デル・トゥークによりバタク語辞典が刊行されていた。宣教は主としてプロテスタントのライン宣教団が当り、従来最もアニミズム的色彩の濃い地域へ重点が指向された。この場合、宣教師はどんな教化政策をとつたか。キリスト教を信仰させること即ち食人慣行の撲滅と簡単に考えてはならない。それに伴う具体的な手段が重要である。ニューギニア北東岸の旧ドイツ領植民地でのルーテル派の宣教のプロセスをみると、まず原住民の中からいわゆる *Black missionaries* を養成し、実際の宣教はかれらに任せたこと、急速な教義は説かず、キリスト教をレベルダウンさせて奇蹟を強調(これは原住民の呪術的觀念を利用した)したことなどがあげられる(8)。その他にも何か相手の心理や生活に有利な条件を導入しなければ簡単には相手を説得できないはずである。バタク族の場合はもちろん文化程度はニューギニア原住民のそれに比してはるかに高いものであつたが、ここでも宣教師はまずバタク族の中から牧師の養成を計り、このためには早くからこれを目的とする学校(二年制)を設けた。この牧師は同時に一般学校の教師も兼ねるのであり、バタク地域各地に多数の教会兼学校がつくられる基盤となつた(9)。これは宣教師たちが夙にバタク族の知的能力や好学心を見ぬい

てそれを利用した対応策であった。

バタク族は古くから知識欲の旺盛な民族であり、すでにヒンズージャワ系の文字を使用しており、この点で「字の読める食人種」などと称せられたこともあった。ラッフルズ自身も一八二〇年、ここで医学、天文学、戦術、行政などについての数種のかれらの文献を入手したほどである<sup>(10)</sup>。宣教師の活動はまさにかかる知識欲と結合したものであり、これは間もなくバタク族の間での急速な教育の普及となつて現れてくる。すでに一九三一年のインドネシア最初のセンサスにおいても、バタク地域は全国で最も児童の就学率の高い地域と化していた。また一九三五年の調査ではタパヌリ州（バタク族居住地）の初等学校数は六〇一（うち私立四四三）生徒数四四六八五人（このほかオランダ語のみを教える小学校十一校、その生徒数二二三人がある）となつており、全人口に対する就学率は四・四％で、これは同年のジャワの三％をはるかに上廻る<sup>(11)</sup>。またバタク地方では同年に日刊新聞一、週刊新聞六、月刊雑誌十一種が発刊されており、これもジャワ以外の外地としては極めて珍しい現象で識字人口の高さを示す<sup>(12)</sup>。外地では歴史的に文化の中心であったミナンカバウ地方やメナド地方と比肩するものがある。さらにバタク地域では一九三五年現在、原住民用の簡易図書室が三八か所に設けられており、年間利用者は四千人をこえていた<sup>(13)</sup>。短期間におけるかれらの精神面の近代化はこれによって十分明らかとなろう。

さらにその間バタク族のキリスト教化には極めて特殊な現象が生れてきた。それは以前から存在していたバタク族の精神的指導者としてのシ・マンガラジャ（一種の活仏的存在）がキリスト教の教義をとりいれ、これとバタク族固有のアニミズムとを融合させて独自の一派をつくり出し、特にトバ部族の間で多数の信者を得るに至つたことである<sup>(14)</sup>。とりいれられたキリスト教的ものには十戒、バイブルの物語、マリアの信仰などがあつたが、特にキリス

ト教の重んずる死後の生活の概念が祖霊や死霊との緊密な交渉を重要な要素としていたバタク族に大きな魅力となつて受容されたという。すなわちバタク族は単におしつけられたキリスト教を受容したのではなく、みずからの能力によつていわば土着的、民族主義的なキリスト教をつくり出したのである。そしてかかる経過のなかに当然食人の慣行も消滅していったのであらう。

### (三)

ラッフルズやユングフーンらの先駆者により注目されたバタク族社会の研究はやがてライデン大学に付属のバタク研究所 Batak Institute の設立をみるに至る(一九〇八年)。これはバタクの地理、民族、経済などの調査を中心として年報 (Batakspiegel) を刊行、この調査にもとづいて現地で各種の開発活動を行うのであるが、宣教師たちはこうした研究の成果をふまえて物質面でも適切な指導をしたようである。筆者がこれと関連して極めて興味深く思うのはバタク地域のキリスト教布教活動に伴い、キリスト教化された部族ならびにアニミズム信仰の部族の居住地に豚の飼養がさかんとなったことである。クーパー・コルもバタク地方がスマトラでの新しい文化圏に属する決定的な証拠はおびただしい豚の群であると述べており(15)、一九三五年にはその飼養頭数は約一五万頭に達していた。

バタク地方には野豚、イノシシは若干いたようであるが、豚は本来いなかったものと考えられる。フォルツはかれらの間のトーテムズムの痕跡を追究してその絵画、彫刻にあらわれた動物からヘビ、水牛、トカゲ、ワニ、犬、犀角鳥などをトーテムの動物としてあげているが(16)、豚は含まれていない。豚は明らかに近代に外部から輸入されたものである。また一八二四年にラッフルズの命令をうけてバタク族の調査を行ったバートン、ワードの二人のイギリス

人宣教師は、かれらが食べる動物性の肉として馬、水牛、山羊をあげているが<sup>(17)</sup>、豚については述べていない。バタク族の生産形態は主として焼畑および水田による農業、狩猟、漁業(トバ湖)、採集などであったが豚はその狩猟の対象ではなかった。もちろん南部のイスラム化したアンコラ部族では、たとえ豚がいたとしてもこれを拒否したことは当然である。ところがキリスト教の布教がさかんとなった地域の部族のなかで同時に豚の飼養が発展してきたことは何を物語るか。筆者の想像ではおそらく宣教師たちが人肉を食べることの代りに豚肉を以てするようすすめた結果ではないかと思う。これについては同様な事例は他地域でも求めることができる<sup>(18)</sup>。たとえばフィジー島では元来獣肉が乏しく「食人はその欠乏を補う意味もあったから、豚その他家畜の補充の道がついてから食人の風習は急速に減少した」といわれる<sup>(19)</sup>。ただフィジー島に豚がいつごろ移入されたのか、また宣教師が果してそれを以て食人にかえるよう説得したかの史料はまだ入手しえない。ただ「豚肉と人肉とは極めてよく似た味がする」という原住民の言葉は記録されている。バタク地域の場合もこのような宣教師側の記録について筆者はなおこれを捜索中である。

#### (四)

こうして二〇世紀以後のバタク族の民族的発展はかなりめざましいものがあつた。教育の普及についてはすでに触れたが、それらの人びとの中から多くの高級官僚、弁護士、医師、教師、警察官、商人、書記などが輩出してスマトラの文化民族の一つとなつた。但しこれにはなおかなりの地域差がみとめられる。たとえばバタク族の宗派別割合は全体としてプロテスタント二五%、イスラム二八%、アニミズム四二%であるが、西海岸地域すなわちかつて食人の最もさかんであつたところではプロテスタントの割合が三三%で最も高く、また近代社会に適合する人材が出ている

のはキリスト教化された部族の居住地が最も高い。一九三五年の調査ではプロテスタントのバタクキリスト教協会の  
 みで牧師、助手合せて一一四〇人がこの地域で働いているが<sup>20</sup>、これはさきにも述べたように四百余の小学校の教  
 師を兼ねているのである。これだけ多数の宗教関係者が集中的に活動しているところはインドネシア全国でも他に例  
 がなく、この数は当時の全インドネシアキリスト教関係者数の実に四分の一に当たっていた。そしてこの一一四〇人の  
 うちの九一〇人、すなわち八〇%までは原住民なのであった。

物質面でもかなり向上したごとくである。具体的な生活水準向上の数字はまだ得るに至っていないが、たとえば職  
 前においてメダン市場へ運ばれた豚の頭数は年に一万頭をこえていたがこれはほとんどバタク地域からとみてよく、  
 自給的農業に依存していた社会にとって市場経済との結びつきはかなり有利な条件となったはずである。バタク族の  
 初等教育終了者の中から相当数のものが上級学校へ進学した可能性もこのような経済的状况と結合したことが考えら  
 れよう。

かくしてバタク族の社会は精神的にも物質的にも大きな変容をうけたことになるが、これは本来バタク族がもつて  
 いた発展の可能性の現れなのであり、余り遠くない昔に食人の慣行をもつていた社会がこうした変容を来したことは  
 やはり一つの顕著な事例といわざるをえないであろう。この点でハイネ・ゲルデルンが「食人が明白に嗜好のため発  
 達しているのはバタク族だけである」とか「バタク族は農業を行い、文字をもつにかかわらず世人はかれらを文化民  
 族としては承認しないであろう」<sup>21</sup>などと断定したのは筆者は同意しがたい。父系制にもとづくバタクの社会に  
 ついてはなお極めて特殊性が残存していること、あるいは特別の「魔法棒」をもつ呪術師の活動のさかんなことなど  
 は近年の研究でも明らかにされているが<sup>22</sup>、それは主としてなおアニミズム信仰の強い部族の間のものである。バ



タク族は受容した宗教の種類により、文化・社会変容に著しい地域差を生じたわけであるが、これはキリスト教支配圏の拡大により次第に統一されつつあるやに見える。

## むすび

未開社会の変容過程についてはデュルケーム、レッドフィールドをはじめ文化人類学、社会学の方面からも種々論じられている。レッドフィールドはいわゆる部族社会から農民社会へ、さらに都市的社会へという社会変容のプロセスの類型化を行っているが、バタク族は本来すでに農民であった。かれらは焼畑農業と水田農業をそれぞれ土地の条件に応じて実践していた。従ってたとえば焼畑農業だけに依存していた社会に水田農業が新らしく導入されたとき起る変化（大家族の崩壊や戸別の農業の発展）なども生じなかつたし、ここでは特に食人慣行の社会即ち最も未開の部族社会というような既存のパターンは適用されないようである。かれらはすでに犁を使用していたがそれも他からの輸入ではなく、独自の発明にもとづくものとされている。ここはむしろ外部からの変化の条件に敏感に反応しうる弾力性ある社会なのであった。もちろんバタク社会の急激な変容はむしろ当時のオランダ政権が植民地統治（特にスマトラ）の必要上自己の味方としてのキリスト教徒を生み出す政策の影響を強く受けており、全く外部的要因によつたものであるが<sup>(2)</sup>、やがて教育の普及、生活の向上に伴い、早くも民族主義的な自覚を生み出させた。これは既述のシ・マンガラジャの特有なキリスト教活動とともにオランダ政権をやがては悩ます原因の一つともなる。この点で最近の東南アジアのいくつかの未開の部族社会でみられるようなナシヨナリズムの浸透による自主的社会変革の条件が早くも二〇世紀初頭からこの地域に醸成されていたこととなる。「食人慣行」といわれる地域社会も実はその実態を十分

に知らねばならぬゆえんである。民族学者のマックス・シュミットが「食人の存在はそれを行う民族の文化の一般的な段階とは何の関係もない。多くの場合、かなり高い文化をもった民族もそれを行なったのである」(2)と述べたことが改めて想起される。筆者はこうしたバタク族の例を一つの手がかりとして各地でかつて食人慣行をもった社会の変容のプロセスの比較研究を行いたいと考えている。さし当りバタクの場合と比較しうるのはニュージーランドのマオリ族の場合であろう。

註

- (1) Hogg, G.: Cannibalism and human Sacrifice. 1958
- (2) Kroeber: Anthropology. 1923. p. 760
- (3) Raffles, S.; Memoir of the life and Public Services of Sir Stamford Raffles, F. R. S. 1830. なまラッフルズのパタク族の慣習についての詳細は拙著「東南アジア地域研究の先駆者としてのラッフルズ」(近刊予定)にゆずる。
- (4) Volz, W.: Nord-Sumatra. 1909. なまこの抄訳は清野謙次「スマトラ研究」(昭和十八年)四二一—四六九頁に収められ  
       <sub>ル</sub><sub>ン</sub><sub>ネ</sub><sup>o</sup>.
- Veth, P. J.: Midden-Sumatra. Reizen en onderzoekingen der Sumatra expeditie. 1877~79. 1882.
- (5) Hogg: ibid.
- (6) Encyclopaedie van Nederlandsch-Ost Indië. Deel I. p. 177
- (7) Zentgraf, H.; Sumatranies. 1936. p. 140
- (8) Hopkin, I.: Kinship and marriage in a New Guinea village. 1963.
- (9) Encyclopaedie: ibid.
- (10) Raffles: Memoir. p. 435.

- (11) Indische Verslag, 1936. p. 85. Algemeen vormend onderwijs の項
- (12) ibid. p. 102. Pers の項。
- (13) ibid. p.101. Bibliotheken の項。
- (14) 馬淵東一、インドネシア慣習法共同体の諸様相（インドネシアの社会構造―一九六九年所収）一一五―一一八頁
- (15) Cooper-Cole, F.; The Peoples of Malaysia. 1945. p. 271.
- (16) Volz: (清野訳本一四二―一四三頁)
- (17) Raffes: Memoir. p. 436.
- (18) Hogg: ibid.
- (19) 松岡静雄、太平洋民族誌 昭和十六年、三二六頁
- (20) Indische Verslag, 1936. p. 107. Zending の項
- (21) ハイネ・ゲルデルン「東南アジアの民族と文化」（小堀甚二訳）昭和十七年、一八六頁、三九二頁
- (22) 倉田勇、スマトラ、バタク社会の婚姻と親族関係（インドネシアの社会構造、一九六九年所収）
- (23) 当時オランダはスマトラ北部のイスラム教徒アチェ族との戦いで苦しんでいた。
- (24) Schmidt, M: The primitive races of mankind. 1926. p.63.